

# 保育者養成課程における幼児との総合表現の実践

～表現に関わる教科と保育現場の連携に視点をあてて～

## Practicing comprehensive expression with young children in childcare worker training courses

～Focusing on collaboration between subjects related to  
expression and childcare settings～

中嶋栄子 附田勢津子 澤井睦美 池田拓馬  
本吉好 橋本知子 坂本利枝子 松坂真奈美

### 要旨

本研究は八戸学院大学短期大学部幼児保育学科と系列幼稚園（八戸学院幼稚園、八戸学院聖ア  
ンナ幼稚園、八戸学院第二しのめ幼稚園）が、令和4年11月9日に実施した、星の子シアタ  
ー『ノアの方舟』において、音楽・美術・体育のそれぞれの教員が『ノアの方舟』という物語の  
多面的な解釈を突き合わせながら、台本や構成、演出に関わり、一つの舞台を作り上げた表現発  
表についての調査、分析、考察である。また、保育者養成校と保育現場の連携を通し、園児と学  
生が楽しみながら音楽表現・造形表現・身体表現の構成要素を共有することは、所属の垣根を超  
えた人間関係の相乗効果によって、園児と学生の豊かな感性が生まれ、保育の実践的な学びとな  
ったことがアンケートより示唆された。

キーワード：総合表現、共働、音楽表現、造形表現、身体表現

### I. はじめに

本法人系列幼稚園年長児と本学幼児保育学科学生による表現発表『ノアの方舟』は、建学の精  
神に謳われているカトリシズムを享受できる物語であり、幼稚園や合唱の授業に聖歌を積極的に  
取り入れることにより、総合表現のみならず、生命の大切さや生き物への感謝の気持ちについて  
学ぶことが出来る題材である。そこで、これまでの系列幼稚園児と学生のリトミックを土台にし、  
養成校での音楽・美術・体育の教員間と保育現場との協働が、より豊かな総合芸術へと導かれる  
ことを目標としこの研究に取り組むこととした。

### II. 総合表現の取り組み

#### 1. 本学における表現の取り組みの経緯

本学科は昭和46年に開学し第一回生38名の卒業生を輩出した。その後学生数は徐々に増  
加し、第5回生からは100名（最大160名）を超える学生が入学した。学生数が増える毎に

音楽的資質も高くなり始め、ピアノレベルは Piano Sonata、Ludwig van Beethoven、Robert Alexander Schumann、Frédéric François Chopin、Johannes Brahms、Peter Ilyich Tchaikovsky、Claude Achille Debussy、Sergei Vasil'evich Rachmaninov、Joseph Maurice Ravel の楽曲や Franz Liszt のハンガリー狂詩曲や超絶技巧練習曲を演奏する学生が出始めた。この多数の学生達は音楽専門専攻を志しても可能と思える感性や熱意、そしてエネルギーを持っていたため、第8回生による第1回音楽会を八戸市公民館にて開催することができた。学内は音楽大学の様にいつも音が満ち溢れていた。この能力を最大に生かす取り組みとして歌劇を学生達に提案したところ、大変に乗り気となり即時にグループが出来上がっていた。表現活動を培うには、音感やリズム感は勿論、歌唱やピアノを通した音楽的要素を取り込みながら集中力・判断力・自立心・向上心・探究心・感受性・創造性・協働性等の能力を引き出す総合表現の研鑽と学生達の連携プレーが必要とされる。これらを受け昭和53～54年には有志による、オペラ「真間の手古奈」服部正作曲を皮切りに、昭和55年より「フィガロの結婚」Wolfgang Amadeus Mozart、「ラ・ボエーム」「トスカ」Giacomo Puccini、「カルメン」Georges Bizet のハイライトシーンをゼミナール活動の一環として各演題を2年間にわたり上演した。その中で特に力を注いだ学生達の学びは、声を出すための呼吸法と発声訓練であった。男子学生達は校舎の窓から見える階上の山並にむかって高音を出すための正しい姿勢をとり、中音域の発声練習では風薫る緑の牧場を目に映し安定した下半身の姿勢をとるなど、恒常的に音の響きを模索する姿が見られた。また、学生によるピアノ伴奏は、譜読みも早く、正確な弾き方が硬くなりがちだったものの特段な問題点は見られなかった。さらには、演出、照明、音楽、大道具、小道具、メイク、衣装、プログラム作成、カメラ等による記録はすべて学生の手により行なわれた。当時のプログラムの挨拶に、「20才の浅い人生経験では、著名な作品を表現するには未熟である。練習の過程でお互いの感情のぶつかり合い、個々の心の葛藤や様々な困難に直面した。十分ではないが自分達なりの力で上演する運びとなった。」と学生が記載している。そして、これらの上演から、『仲間との友情、人の愛と勇気、確かな希望と前に進む実行力』を学んだと卒業生は言っている。その後、これらの表現活動は全学生に必要であるということから、音楽と美術教員が協働し、保育現場で使えるオペレッタに取り組むようになった。近年では、体育教員も加わり、卒業公演として「ミニオペレッタ」を市内の園児を招いて上演している。学科と系列幼稚園との連携では、昭和56年度の第1回「光星学院附属幼稚園音楽発表会」を皮切りに名称を変更しながら回を重ねてきた音楽会が、平成30年に「第37回八戸学院星の子音楽会」となり、本学科の学生達が「スペシャルハーモニー」として合唱で参加するようになった。この学科と各6園の附属幼稚園（現在は3園）との連携は、音楽指導を中心に歌唱や合奏指導、さらには学生と合同のリトミックの授業を展開させている。また、そのプロセスの中で歌唱や合奏、マーチングドリル、物語の自由表現「不思議な森」、「ノア方舟（抜粋版）」、保育内容「表現」虹理論より音と色とリズム・四季（園児と学生）、系列幼稚園教員と短大生の大合唱等の連携を図り毎年八戸市公会堂で公開してきた。その後は八戸市公会堂の工事やコロナ感染症の流行によりこの音楽会を実施出来ない状況に陥った。その後、令和4年11月9日に「星の子シアター」と新たに命名し、総合表現「ノア方舟」を演題として系列幼稚園児3園と学生達が連携し上演する運びとなった。

(1) 音楽表現

1) 保育現場で必要とされる音楽の指導力

- ①子どもの発達段階を理解している。
- ②創造しながら体を動かすことのできる安全な空間を設定できる。
- ③基礎的音楽概念を有している。
- ④音楽で楽しく遊びながら、音感やリズム感は勿論、集中力・判断力・自立心・向上心・探求心・感受性・創造性・協働性の能力を引き出すことができる。
- ⑤音楽を聴き、反応し、楽しいと感じさせ、想像力のもとになる感性を養うことができる。

2) 音楽表現における実践力

- ①幼児と楽しく歌ったりする際のピアノ・歌唱実技表現ができる。
- ②幼児が快さを感じるような身体の動き（ジャンプ、転がる、スキップ他）のリズミカルな表現の展開ができる。
- ③手遊びを素材として保育の展開ができる。
- ④音に対する集中力を高め自由な表現と身体を動かす楽しさを味わわせることができる。
- ⑤無音と不動による沈黙の音を知覚し、集中力とリラックスを生み出せる。

(2) 身体表現

- 1) 本学の教育課程の中に「表現（身体）」の科目がないことから、短大では「体育実技」、「幼児体育Ⅰ」「幼児体育Ⅱ」の各授業（演習・実技等）の一部で取り上げている。また、幼稚園においても「リトミック教室」や「造形教室」のように年間を通して園児と関わる機会がないため、星の子シアター『ノアの方舟』の動きつくりと身体表現においては、音楽科のリトミック指導内に合わせて行う形態で行った。
- 2) 第一幕「天地創造」の場面は、影絵での表現を取り入れ、演者を「幼児体育Ⅱ」を履修した学生で構成した。身体表現においては、振り付けや動きの指導ではなく、自分がイメージした動きの習熟に向けた指導を行った。今回行った影絵は、リアルな動きに着目し、それぞれが動きから、皆の意見を出し合い完成させた。

(3) 造形表現

ノアの方舟における造形表現では、学生の自主性を尊重し小道具大道具の制作を行った。制作のアイデアは学生たちが作りたいものを自分自身で制作することを促し、技術的に分からないことや実現しにくい部分などを助言した。その際、学生には美術室を訪問するよう伝え必要な材料やアイデアについて実際に作業を行いながら指導した。その中でも小道具の杖や剣等の制作が多くあった。舞台美術を制作する際、学生はまず口頭で説明するが質問を投げかけてみると漠然としたイメージであることが多く、その様な場合は簡単なエスキースやイメージを図に起こすよう指導した。制作する初期の段階でイメージの齟齬が生じていると、完成に近くなった段階で完成イメージの違いに気づくことが多く、修正が非常に困難になるため制作の初期段階で学生と教員のイメージの共有を図ることを心がけた。またそれができない、もしくは苦手な学生へはインターネットの画像検索機能等の使用を勧め、思い描いているイメージにいちばん近い画像を選ぶように指示した。そうした下準備を経た上の制作では次のような方法をとった。

杖などの制作は模造紙の使い終わった筒や新聞紙を材料とし、筒を支持体としてその周りに新聞紙を巻き付け、新聞紙はセロファンテープ等で固定し盛り上げたい部分や、形状をカ

ーブさせたい部分には新聞紙を丸め固定した。曲線状の立体も新聞紙とセロファンテープを工夫しながら用いて様々な形状の制作を行なった。形ができた後に、色画用紙やメッキテープ等を表面に貼り付け装飾を行った。また半紙などを糊で貼り付けたのち絵の具で着色し完成させた。剣の制作や弓矢の制作ではスタイロフォームを用いて行なった。形の加工には電熱線を用い、棒状の電熱線で細かな彫刻も施し、スタイロフォームへの着色はアクリルガッシュを用いて直接着彩し仕上げた。

舞台芸術の美術制作においては、特にイメージの共有が最も肝心である。学生はどのように制作するか全く想像できないまま相談に訪れることもあるが、設計図を書かせ材料と制作方法を指導すると実際の制作は容易に運ぶことが多くあった。さらに学生が思い描く完成イメージが造形表現では制作困難な場合には実現可能なイメージを提案し学生が納得した案を取り入れるように指導を行った。

## 2. 舞台「ノアの方舟」台本の場面毎の協働について

### (1) 天地創造

単旋律、無伴奏の宗教音楽である「グレゴリオ聖歌」を効果音とし、学生が影絵で天地創造を表現した。影絵は舞台上に設置されたスクリーンに後方からプロジェクターで投影し、スクリーンとプロジェクターの間に設置した舞台上で手や身体を使用し、天地創造にでてくる動物や人間などを表現した。身体での表現が難しい場面については、切り絵を用いての表現を行った。ほとんどの学生が影絵での身体表現は初めてだったため、どのような表現がよいか表現者である学生たちの話し合いを重要視した指導を行った。練習では1場面ごとにどのように映るか、演じていない学生たちが見ると同時に動画を撮影し全員で確認を行った。また、グレゴリオ聖歌はゆっくりとした曲調のため、ゆったりとした動きを心掛け、静と動のメリハリのある動きで、天地創造の雄大さを表現した。

園児たちとの関わりは少ない場面ではあったが、園児たちの「あ、あ、食べちゃダメ！」の掛け声とともにリンゴを食べるシーンを、影絵と園児たち、さらに音響とのやり取りがあり、それぞれの担当者との打ち合わせを入念に行い、タイミングを合わせながら完成させた。演者は影で表現をしているため実際に園児たちと目を合わすことはできない。その点を考慮し、園児たちにわかりやすい合図を決め、連携をとることができた。その際に投影する画像は学生たちが思い描くイメージを優先するため、インターネットから検索するようにした。ただし、インターネットから画像を選んでくる際に最も注意しなければならないことは著作権の問題であるため、画像共有サイト **Adobe Stock** からの検索をうながし、身体表現と映像表現を総合的に考え工夫し表現することで、統一したイメージやメッセージ性が高い表現となった。また、学生自身の自己決定によって画像を選ぶことにより、責任感が生まれるとともに、表現に対する動機や意欲が向上するきっかけとなったと考えられる。

この共に演じ、創り上げた経験は、保育者としての表現力や指導を身に付けるうえで貴重な体験となったであろう。

### (2) ノアと家族

ノア役および家族役の学生は、歌うことや声を出すことに対して抵抗感がなく、元来の声

質もよく声量もあったが、呼吸法や発声について知識や理解が不十分であったため、腹式呼吸で深く息を吸うこと、下腹部の腹筋を使って声を支えること、上顎を開け、鼻腔や額、鎖骨等に声を当てるように発声するよう指導した。すると、短期間に歌声および台詞の声量が増し、歌唱時の音程も安定していった。学生達は、当初は人前で演じることや歌うことに恥ずかしさを感じていたが、楽しそうに動物の表現を行う園児の姿にふれ、学生の表現することに対する意識が変化し、自発的に台詞の表現や演技、歌唱の練習を行い、日毎に改善されていった。また、小道具の制作では、一連の作業を学生とともにを行い技術的に困難な箇所のみ教員が手を施し、ほとんどの部分を学生自身で作上げたことにより、愛着が湧き舞台上の演技では小道具をしっかりと利用し演技する姿が見られた。本番では、自分の役になりきり、自信をもって演じることができたと言える。このように音や言葉の訓練・造形制作を通し、各々の役を理解するきっかけとなり、演技への動機や意欲を高め、舞台表現の質全体を向上させる働きがあると考えられる。

### (3) 方舟制作

学生と園児との音楽活動ではリトミックの身体行動を通じた表現活動において、音感・リズム感の成長が促されている。そして偶発性の中で感覚を通じた五感で受けた外的刺激を感覚機能に移行する活動は向上し始めたと考える。これにより、マインドフルネスの効果が培われ、全ての束縛から開放され、芸術的感動を表現できる様な指導展開を図り、以下の項目に留意し活動した。

#### 1) 活動内容

- ①五感「視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚」で受けた外的刺激を感覚機能に移行する活動
- ②即時反応活動は思考力と密接に結びついた行動表現
- ③感覚器官を充分訓練しながら、頭脳と身体の連携を図る
- ④身体行動を通じた音感、リズム感の成長を促す
- ⑤偶然、偶発性の中での即時反応活動
- ⑥感覚器官が鋭敏になることで、集中力・直観力・記憶力・創造力・創造力が高まる

#### 2) 遊びを通じたリズム活動・ソルフェージュ（身体表現と音楽表現の融合）

- ①拍と数（テンポを踏まえた基礎リズムの指導）
- ②音価を身体で表現する（リズムカード遊び）
- ③即時反応（床リズム・偶発性リズム遊び）
- ④2拍子・3拍子・4拍子をスイングしながら空間を身体で感じる
- ⑤色々な動物や乗り物になりきったリズム遊び（即興表現）

園児と学生がリトミックの授業を通して1)、2)を踏まえ実践してきたが、園児の個々の発達や学生達の資質もそれぞれ異なる面がある。物語の方舟を作る表現の意義と目的(物語の柱である)を明確にさせつつ「木の伐採、木を運ぶ、木を組み立てる、方舟に色を塗る」を園児が共有するリズム活動とし、音色の重厚さや音の強弱を聴き身体表現する動きが一辺倒にならないように、ひとつひとつ表現するようにした。さらに動きが皆一緒にならないように園児に考えさせ、自分自身の音の秩序を作れる様に「時間、空間、エネルギー」を利用したリズム遊びを試みた。和声化した音楽をよく聴き、リズム・拍・アナクル

ーシス・フレーズ・ニュアンスを活性化させる取り組みとした。

(4) 入舟

「動物の謝肉祭」(1887) Charles Camille Saint-Saëns (1835～1921) をピアノデュオとパーカッションでの楽曲にアレンジし、動物に扮した園児が学生と共に演奏に合わせ入舟する場面の曲とした。「動物の謝肉祭」は Saint-Saëns が 51 歳の時の室内楽作品で、タイトルには「動物学的大幻想曲」という副題が添えられている。作品は Saint-Saëns の友人のチェリストが主催した音楽会の為に作曲された全 14 曲からなる組曲である。入舟の場面では、園児が様々な動物の表現に適するであろうと思われる曲を抜粋し、のびのびと表現できるよう演奏にあたった。

1) 曲目毎の考察

ア. 序奏とライオンの行進 (ハ長調 4分の4拍子)

コンガ・ボンゴの音色を合図に演奏がスタートし、百獣の王ライオンから動物たちのパレードが始まる。威厳のあるメロディーと 4 拍子のリズムに合わせ、子どもたちがライオンやねこになりきり堂々と動物たちを演じた。ライオンの勇壮さを表すため、曲中に大太鼓やシンバルを用いた。また、ユニゾンでのダイナミックな音の動きに導かれ、子どもたちがライオンの雄叫びを表現した。

イ. めんどりおんどり (ハ長調 4分の4拍子)

めんどりとおんどりの掛け合いを描写したこの曲は、連打音をスタッカート奏法により歯切れよく演奏することを心掛け、鶏に扮した子どもたちが、鶏の素早く身動きの軽い様子及び音の跳躍に合わせ飛び立つ姿を表現できるよう明確な音色を意識し演奏した。

ウ. 象 (変ホ長調 8分の3拍子)

トロンボーンによる親子象の鳴き声を合図に曲がスタートし、ゆっくりと歩くテンポ及び 3 拍子の 1 拍目を強調し、象のダイナミックな動きが表現できるよう演奏した。

エ. カンガルー (ハ短調 4分の4拍子)

曲の中に多用されている装飾音及びスタッカートを強調し、動物がびよんびよんと飛び跳ねる動きを意識し演奏した。

オ. かめ (変ロ長調 4分の4拍子)

レイnstスティックによる波の音から曲がスタートし、ゆったりとしたかめの動きが表現できるようテンポを意識し演奏した。Saint-Saëns は、曲中にオフエンバック作曲のオペラ「天国と地獄」の中の有名な「カン・カン踊り」のメロディーを登場させている。低音でのんびりと演奏されるメロディーに合わせて、かめをはじめ動きの穏やかなキリンなどの動物に扮した子どもたちが、ゆったりとした表現で動けるように、深みが感じられる音色をピアノで表現した。

カ. 化石 (ト短調 2分の2拍子)

軽快でアップテンポな曲に合わせ、軽やかな動きで表現できるよう演奏した。曲中には Saint-Saëns 自身が作曲した「きらきら星」が織り交ぜられている。また、楽しい曲風を活かし、ビブラスラップ・拍子木といったアクセントとなる楽器を取り入れたアレンジにした。テンポが速い 2 拍子のこの曲の主要なメロディーは、Saint-Saëns 自身の「死の舞踏」からの引用である。続いて「月の光に」、「三匹の盲鼠」、「フレール・ジャック」等の童謡や民謡、「セヴィリアの理髪師」Gioachino Antonio Rossini のアリア「今の歌声は」が立て

続けに登場する。軽快な音楽の中で裏拍に拍子木をアクセントとして入れることにより、動物になりきった子どもがジャンプをしたり、ポーズをとったりといった動きへ繋げられるよう工夫した。

キ. 白鳥 (ト長調 4分の6拍子)

優雅で美しいメロディーに合わせ、白鳥が羽ばたく様子や子どもたちが扮した動物が滑らかな動きで表現できるよう優しく柔らかい音色を意識し演奏した。

ク. 終曲 (ハ長調 4分の4拍子)

1~13 曲全ての主題が次々と展開される曲の流れに合わせて動物の動きが表現できるよう勢いを感じられる演奏とした。また、ドラム・シンバル・スレイベルといった楽器により賑やか且つ華やかなアレンジでステージでの表現を盛り立てた。

入舟前までのステージ発表における音楽の流れとして「グレゴリオ聖歌」「教会のアリア」(イタリア古典歌曲)といったマイナー及びシリアスな曲でスタートするが、この入舟の場面にてコミカル且つユニークな楽曲を用いることにより、場面転換の効果を齎し、園児が楽しくのびのびとした身体表現へと導くことができた。また、学生においてもステージ上で園児と共に表現することにより、園児との関わり方及び支援という点において保育者を目指すうえでの学びとなったといえる。また、園児の衣装も統一感を持たせるために、各園のアイデアを美術教員が目を通し制作にとりかかった。

2) 方舟への入舟シーンでの入口に掛かるスロープの制作においては、運搬と場面転換の際に持ち運びがしやすい様配慮するとともに、2分割された部分を重ね合わせると、幅 300mm、奥行き 900mm、高さ 1,200mm の直方体となる様設計し、オイルステインを用いて着彩し木の風合いを残すよう配慮した。また、重ね合わせの際、直方体となることで搬入の際も運搬車に積み込みやすく保管も容易になった。さらに格子状の形状は実際のスロープの壁面と板材が貼ってないという点で形状が違うが、木材が格子状に組み合わせられスロープが抽象的に表現されたことで、本物との対比が生まれず造形精度の低さ等が認識されることを抑えられた。

#### (5) 神の怒り、嵐

人間の墮落に怒った神が洪水を起こす場面において、Johann Friedrich Franz Burgmüller (1806~1874) Op.109-13 「大雷雨」を用いた。ダイナミックな曲想は、遠くから雷鳴が響き渡り黒雲がたちこめ、やがて雨が降り出す情景が窺える。次第に雨は激しさを増し、稲妻、雷鳴も加わってしばらく降り続く。この様な情景を表現するため、曲中に大太鼓を用い、園児の頭上に広げた青の布を波に仕立てた演出とした。続く水の中の場面では、入舟の場面において選曲した「動物の謝肉祭」より「水族館」を用い、降り続いた雨により海と化した水中の様子を、学生による園児のリフトアップ及びダイナミックな波の動きで表現した。海水が光に反射しキラキラと輝く情景表現が美しいメロディーを、ピアノ演奏に合わせ園児と学生が一体となって表現した。

(6) 約束 (虹のプレゼント)

旧約聖書、創世記第9章11節～13節に「あなたたちとあなたたちの子孫、生き残った鳥、家畜、野生の動物すべてに、わたしはおごそかに誓う。もう二度と洪水で世界を滅ぼしたりはしない。その約束のしるしに、雲の中に虹をかけよう。この約束は、あなたたちと全世界に対し、この世の終わりまで効力を持つ。雲が大地を覆う時、虹が雲の中に輝くだろう。その時わたしは、いのちあるものを二度と洪水で滅ぼさないと、堅く約束したことを思い出そう。雲間にかかる虹が、地上のすべての生き物に対する永遠の約束を思い出させるからだ。」と虹についての記述がある。学生はこの物語の意図するところを、何度も対話を繰り返し、これを基に詩文『虹のプレゼント』を創作した。

『虹のプレゼント』

ありがとう 素敵な贈り物をくださった神様へ  
 ありがとう こんなに素敵な贈り物を  
 ながいながい雨が上がった  
 ようやくお日様がでた  
 暗闇からのすばらしい景色  
 さあふみだそう 新しい世界へ  
 ふみしめよう広い大地を  
 もうすべてを流すことはない  
 私たちは神様を怒らせることはしない  
 ありがとう 素敵な贈り物をくださった神様へ  
 ありがとう こんなに素敵な贈り物を

そして、この詩歌は14名の園児によって、ピアノによる「Ave Maria」Saint-Saëns に合わせて、台詞として発表された。

(7) エンディング

エンディングは、園児、短大生出演者全員による、鈴木恵作詞作曲「With Christ」\*1の斉唱で物語の締め括りとした。この曲は、メロディーが素朴で美しく、園児にとって歌いやすい音域の曲であり、園児も学生も好んで歌ってきた曲である。ノアは神様を信じる正義の人であり、子どもたちと方舟を作り、家族、動物たちと共に大洪水を乗り越え、新しい世界で平和に生きていこうという物語の結末に、まさに即したものである。さらに、本学の建学の精神「神を敬し人を愛する」にも則った内容であると言える。「ノアの方舟」の最後に、この「With Christ」をシンプルなピアノ伴奏のみの斉唱にすることで、園児と学生の歌声が混ざり合い、共鳴し、年齢や所属を超えた一体感を感じ、神の愛や正義と平和を全員で分かち合うことができるのではないかと考えられる。園児にとって、神の愛、正義や平和について理解することは難しいものである。しかし、「ノアの方舟」では、園児が物語のなかの一員として虫や動物、自然を学生と共に表現することにより、人を思いやり、皆で協力することの大切さを子どもなりに感じるのではないかと考えられる

\*1 出典「祈りの歌を風にのせ」女子パウロ会 2000.5

### Ⅲ. アンケートの実施

公演終了後に、学生が星の子シアター「ノアの方舟」をどのように捉えているのか、グーグルフォームによるアンケート調査を実施した。名前を消去し、個人が特定されないように配慮した上で、アンケートの記述内容に対し、KH Coder の頻出語抽出・共起ネットワーク図を用いて分析および考察を行った。

#### 1. 倫理的配慮

本研究を実施するにあたり、対象者には 1) 結果は公表にあたり個人が特定されることは無いこと、2) 調査によって得られたデータは研究以外の目的で使用しないこと、3) 本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はないことを調査票配布時に口頭および書面にて説明し、同意した学生のみに調査を依頼した。調査票の提出をもって研究に同意したものとみなした。

#### 2. 対象者及び実施日・実施場所

対象者：令和 4 年度八戸学院大学短期大学部学生 173 名（2 年生 85 名・1 年生 88 名）

実施日：2022 年 11 月 17 日、2022 年 11 月 19 日

実施場所：八戸学院大学短期大学部幼児保育学科講義室

#### 3. アンケート内容と手続き

2 年生は、星の子シアター「ノアの方舟」に出演したことについて、1 年生は観客として観劇したことについて、以下の質問に対し自由記述で回答を行った。

##### (1) 2 年生対象アンケート

- 質問項目：1. あなたが、星の子シアター「ノアの方舟」で学んだことは何ですか。  
2. 園児がノアの方舟を演じることについて、どう感じましたか。  
3. 次年度、自分の役の改善点がありましたら述べてください。  
4. 今回初めて、園児と短大生が一つの演目を演じましたが、感想を述べてください。

##### (2) 1 年生対象アンケート

- 質問項目：1. 園児の表現について、感じたことを述べてください。  
2. 短大生の表現支援について、感じたことを述べてください。  
3. 舞台「ノアの方舟」を、短大生と園児と一緒に発表したことについて、感じたことを述べてください。  
4. あなたが、舞台「ノアの方舟」から学んだことは何ですか。

### Ⅳ. 結果と考察

抽出語・共起ネットワーク、記述内容

回答された自由記述文をテキスト化し、「文」を単位に設定して KH Coder で搬出 150 語を抽出し、共起ネットワーク図を作成した。

1. 2年生アンケート結果

(1) 星の子シアターで学んだこと (表1, 図1)

表1 頻出150語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
子ども	27	衣装	5	出る	3	試行錯誤	2	様子	2	歌う	1
学ぶ	24	援助	5	小道具	3	持つ	2	裏方	2	改善	1
協力	21	演じる	5	説明	3	実感	2	立つ	2	確認	1
作品	17	仕方	5	伝わる	3	集中	2	連携	2	学べる	1
作り上げる	16	流れ	5	堂々	3	出す	2	話す	2	完璧	1
表現	13	ノア	4	舞台裏	3	出来る	2	お話	1	感動	1
保育	13	意見	4	方舟	3	身体	2	やる気	1	慣れる	1
子供	12	演技	4	良い	3	人数	2	アイデア	1	観客	1
一つ	11	改めて	4	1つ	2	凄い	2	イメージ	1	頑張る	1
準備	11	楽しい	4	それぞれ	2	成長	2	コミュニケーション	1	期待	1
動き	11	楽しむ	4	ひとつ	2	接す	2	タイミング	1	機会	1
作る	9	達成	4	チーム	2	全員	2	プレッシャー	1	気づく	1
園児	8	役割	4	リハーサル	2	素早い	2	リード	1	起こす	1
難しい	8	一緒	3	違う	2	多く	2	衣裳	1	技術	1
感じる	7	音楽	3	影絵	2	対応	2	育てる	1	協調	1
見る	7	果たす	3	楽器	2	大きい	2	一人ひとり	1	近づける	1
自分	7	関わり	3	活動	2	大人	2	一体	1	携わる	1
知る	7	関わる	3	環境	2	恥ずかしい	2	運ぶ	1	経験	1
舞台	7	気持ち	3	喜び	2	仲間	2	影響	1	計画	1
分かる	7	教える	3	繋がる	2	動く	2	映像	1	見せる	1
練習	7	考える	3	言う	2	発表	2	演奏	1	現場	1
たくさん	6	行事	3	行う	2	物語	2	応える	1	言い合う	1
先生	6	支援	3	合わせる	2	本番	2	音響	1	戸惑う	1
短大	6	事前	3	最初	2	遊戯	2	可愛い	1	公会堂	1
動物	6	時間	3	仕事	2	幼稚園	2	可愛がる	1	効果	1

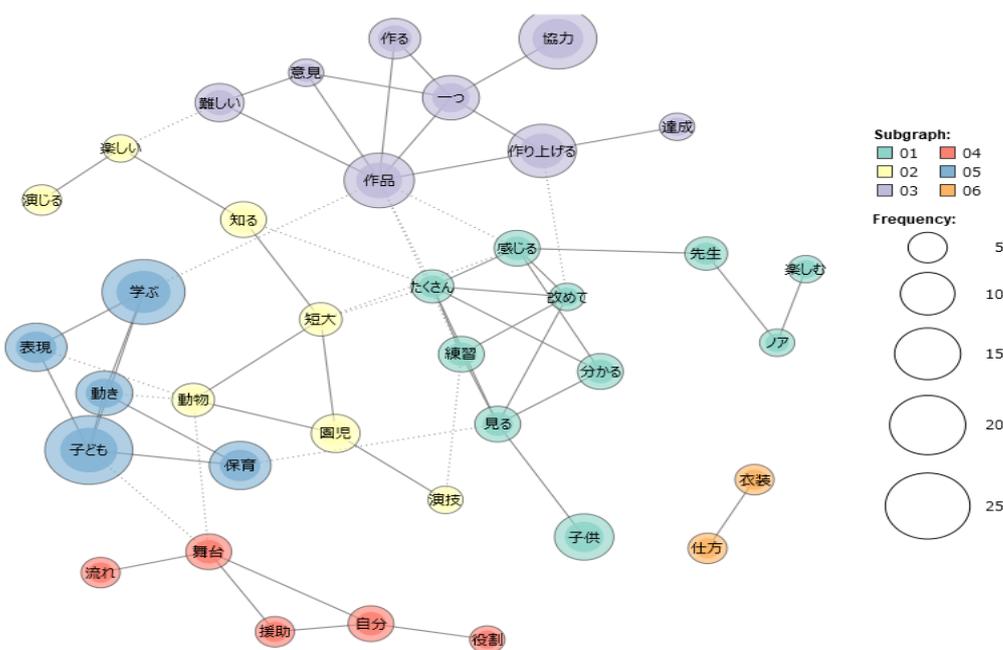


図1 共起ネットワーク

1) 抽出語

「子ども」「子供」「園児」の出現回数を合計すると47回で最も用いられていた言葉であった。次に、「学ぶ」24回、「協力」21回、「作品」17回、「作り上げる」16回、「表現」13回と用いられていた。学生が園児と一緒に動物を演じたり、舞台裏で園児の着替え等支援を行ったことから、子どもの動き、保育者の子どもへの接し方を学んだと捉えることができる。また、学生、園児、保育者、舞台の裏方が協力して一つの舞台を作り上げることの大切さや楽しさ、達成感を学んだと考えられる。

2) 共起ネットワークの分析

「子ども」を中心としたグループでは、「子ども」「学ぶ」「動き」「表現」「保育」と繋がっており、さらに「表現」は別グループの「動物」ともつながっている。「保育」は、別グループの「見る」とつながっており、このことから学生は「子ども」の「動き」や「表現」を「保育者」の子どもに対する関わりを「見る」ことから学んだのではないかと考えられる。「作品」を中心としたグループでは、「一つ」「作る」「作り上げる」「意見」と結びつき、「協力」「達成」へとつながっていく。また、「作品」は「学ぶ」のグループ、別グループ「練習」ともつながっており、一つの作品を作るには、練習を重ね、意見を出し合って作り上げ、協力し、達成していくことを学んだと捉えられる。

3) 記述内容

「子ども」について、「子どもたちと関わる大切さを学んだ。」「子どもたちと先生と協力し合い、演じ、楽しむことを学んだ。」「このような行事を通して子どもの表現力や想像力を育てる大切な機会だ。」等、子どもを通しての学びが見られた。また、「全員で協力して作り上げる大変さ、達成感」「一つの行事にこんなにたくさんの人が関わり支え合っていることを知った。練習時間が少なかつたにも関わらず、ここまでのものを作り上げることができた園児の力に感動した。」等、舞台を作り上げるための協力や団結についての記述も多かった。さらに、「子ども」についての記述と重なる点ではあるが、「練習や本番での保育者の動きなどをよく見て学ぶことができました。子どもたちが集中してやってもらえるようにするために、保育者の声かけが大切だとわかりました。」「子どもの着替えは素早く多くの子どもを見なければならぬ等保育者の大変さを実感できた。」等、保育者の動きを間近で見ることによって、子どもに対する保育者の声かけ、関わり方を学ぶことができたと考えられる。

4) 質問1のまとめ

これまでの分析、記述内容から学生が学んだことは、主に次の3点にまとめられる。

① 協力・団結・コミュニケーションの大切さ

ア. 一つの舞台を作り上げるには、多くの人の協力と団結力、コミュニケーションが大切である。

イ. 一人一人がそれぞれの役割を果たすことで作品としてまとまり、達成感に繋がる。

ウ. 計画、段取り、練習、裏方の準備等、共に試行錯誤しながら作り上げる苦労と喜びを学んだ。

② 保育者の動きや子どもへの支援の仕方

ア. 子どもが堂々と演じられるように支援することの大切さや難しさ、子どもとの関わり方や接し方、可愛がることと支援は違うということ、子どもと接していくなかで

学んだ。

イ. 練習、本番での保育者の動きを見て、子どもが集中できるような声かけや支援が大切であり、子どもたちは練習時間が少なかったにもかかわらず、堂々と演技していた。

③ 多様な表現と想像力の創出

ア. 子どもたちの表現力、想像力を育てる機会となり、練習、本番を通しての子どもの成長を感じた。

イ. 音楽は歌、楽器だけでなく身体でも表現でき、動物の動きも音楽を感じて身体で表現する楽しさを学んだ。

ウ. リアルな動物の衣装、楽器で自然や動物の効果音を出す等、道具や楽器を使って表現する方法を学んだ。

(2) 園児がノアの方舟を演じることについて、どう感じたか (表2, 図2)

表2 頻出150語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
動物	35	頑張る	5	堂々	3	指示	2	オー	1	家族	1
演じる	26	姿	5	舞台	3	時間	2	ガ	1	歌声	1
感じる	24	素敵	5	聞く	3	取り組む	2	サポート	1	荷物	1
子ども	21	分かる	5	本物	3	重ねる	2	スピード	1	改善	1
自分	17	音	4	鳴き声	3	出す	2	タイミング	1	皆様	1
表現	17	覚える	4	話	3	上手	2	チャイム	1	学ぶ	1
難しい	14	機会	4	ステージ	2	凄い	2	ビデオ	1	感じ	1
園児	13	見える	4	ノア	2	成長	2	ペイント	1	関わる	1
楽しい	13	言う	4	ハンド	2	生き物	2	リズム	1	含む	1
役	13	人	4	ベル	2	昔	2	ワクワク	1	喜び	1
練習	12	声	4	意味	2	大きい	2	意欲	1	気づく	1
一生懸命	10	素晴らしい	4	一人ひとり	2	短大	2	衣裳	1	貴重	1
動き	9	多い	4	海	2	知る	2	衣裳	1	急	1
見る	8	内容	4	学生	2	伝わる	2	違う	1	協同	1
子供	8	本番	4	楽しむ	2	登場	2	育む	1	協力	1
保育	8	役割	4	驚く	2	負ける	2	一つ	1	緊張	1
それぞれ	7	立つ	4	繋がる	2	勉強	2	一つ一つ	1	系列	1
理解	7	たくさん	3	見せる	2	保護	2	一言	1	激	1
良い	7	演技	3	工夫	2	話す	2	運ぶ	1	元気	1
セリフ	6	可愛い	3	考える	2	あり方	1	影絵	1	個人	1
感動	6	教える	3	行く	2	お客	1	影響	1	五感	1
経験	6	身体	3	最後	2	お話	1	援助	1	後ろ	1
子	6	前	3	最初	2	さまざま	1	演奏	1	向ける	1
出来る	6	大人	3	作り上げる	2	もう少し	1	横	1	行う	1
音楽	5	動く	3	仕方	2	イメージ	1	可愛い	1	行事	1

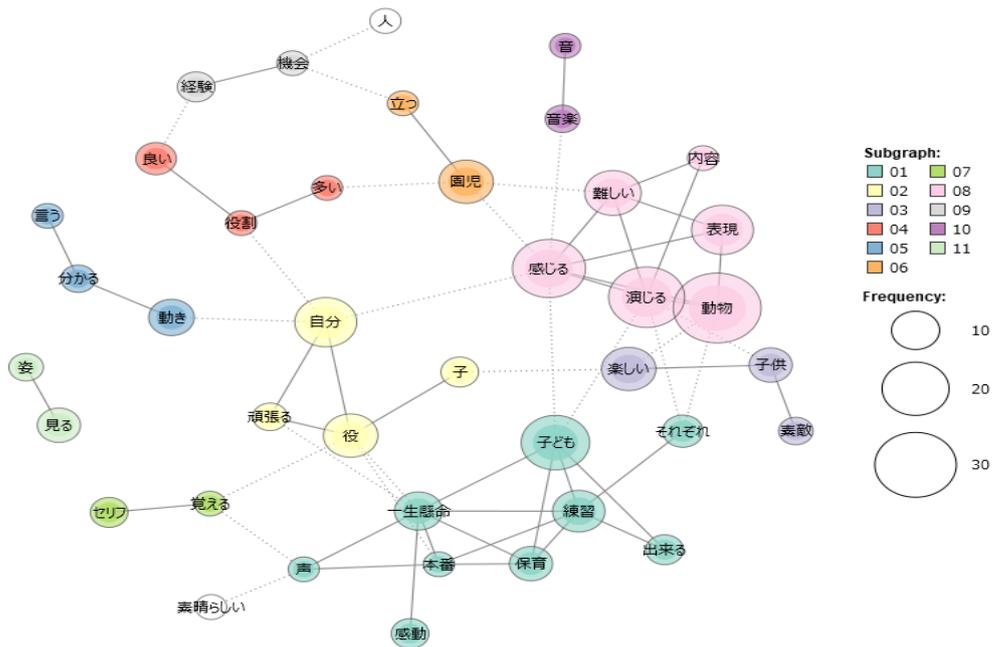


図2 共起ネットワーク

### 1) 抽出語

「動物」35回、「演じる」26回、「子ども」「子供」「園児」「子」を合わせると48回であった。続いて、「自分」17回、「表現」17回、「難しい」14回、「楽しい」13回、「一生懸命」10回と用いられていた。このような言葉から、子どもが動物を表現することは難しいと感じていたが、楽しそうに一生懸命に演じていたとの回答が多かったと考えられる。

### 2) 共起ネットワークの分析

「動物」「演じる」を中心としたグループでは、「表現」「感じる」「難しい」とつながっている。「動物」は他のグループの「子供」「楽しい」とつながりがあり、このことから、動物を演じることは難しいが、子どもは楽しそうであったことが捉えられる。

「子ども」を中心としたグループでは、「練習」「一生懸命」「保育」「出来る」とつながっており、さらに「一生懸命」から「保育」「本番」「声」「感動」とつながっている。子どもが一生懸命保育者とともに練習を行うことによって出来るようになり、本番での感動へつながったことが読み取れる。

### 3) 記述内容

「それぞれ動物になりきり表現していて素晴らしかった。」「動物や海の生き物になって動き、楽しそうだった。」「園児にはとても難しいと感じていたが、短大生より努力していた。」「練習を重ねるごとに子どもたちがどんどん上手になっていて、子どもの成長のスピードを感じた。子どもの表現力の高さを感じた。」「子どもたちが自分のやることをわかっていて、保育者に言われなくても子ども自身で動き、衣装に着替え、保育者の指示を聞いていた。」「動物や海の生き物をリトミックの表現を通して、音楽の楽しさを感じていた。」「行事のための保育ではなく、その子どもらしさの表現、楽しいと思えるような発表で良かった。」等、子どもの様子や表現についての記述が圧倒的に多かった。また、『ノアの方

舟』の演目について、「聖書という、生きるうえでの心得や人としてのあり方を書いたものを実際に演じ、一人一言のセリフを話すことは、心にとっても良い影響を与えると思う。」「平和について考えることができた。」等の記述もあった。保育者について、「子どもは台本を読むことができないので、保育者が何度も配役の練習や準備を行い、子どもたちに教えていた。」「この音が聞こえたら、こうだよ、等わかりやすく説明していた。」「自分が保育者だったらあのように教えたい。」との記述もあり、学生は保育者から多くのことを学んでいたと考えられる。

#### 4) 質問2のまとめ

これまでの分析・記述内容から、園児が『ノアの方舟』を演じることについて、次の3点にまとめられる。

##### ① 子どもの表現力の高さ、表現活動を通しての成長

- ア. 練習を重ねるごとに子どもたちの表現に工夫が見られ、本物の動物のように見えた。
- イ. 子どもが自分の動きを子どもなりに考えることで、意欲、積極性、協同性が高まった。
- ウ. 行事のための「見せる」保育ではなく、子どもの個性が出て楽しかったと思える発表だった。一人一人堂々と演じ、ここまでできるのかと感動した。
- エ. 子どもたちの成長が見られた良い経験であり、保護者の喜びに繋がる。

##### ② 音楽の楽しさを体感

- ア. ノアの物語は、子どもにとっては難しい内容だと思うが、リトミックでの音楽やリズムに合わせた表現はわかりやすい。
- イ. ハンドベルや歌、音楽に合わせた動物の表現で音楽の楽しさを体感できる。

##### ③ 保育者の適切なサポートとこどもとの信頼関係

- ア. 子どもにわかりやすく、表現や台詞のタイミングを提示していた。
- イ. 子どもたちは、先生方を信頼し従い、自分から動き、着替え等ができるようになっていた。
- ウ. 自分も系列園の先生方のような保育者を目指したい。

(3) 次年度、自分の役の改善点がありましたら述べて下さい。(表3, 図3)

表3 頻出150語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
大きい	14	必要	3	イメージ	1	音楽	1	後ろ	1	準備	1
動き	12	良い	3	キョロキョロ	1	下手	1	効率	1	小さい	1
見る	10	ゾウ	2	キリン	1	歌える	1	工夫	1	消す	1
動く	9	意識	2	スクリーン	1	箇所	1	行う	1	消極	1
もう少し	7	影絵	2	ステージ	1	会場	1	行える	1	詳細	1
特に	6	演じる	2	セリフ	1	改善	1	降りる	1	上手い	1
考える	5	活躍	2	ダンス	1	学べる	1	捌ける	1	場所	1
行動	5	見える	2	テキパキ	1	楽しむ	1	残念	1	状態	1
自分	5	子ども	2	パラパラ	1	噛む	1	仕方	1	身体	1
練習	5	指導	2	パソコン	1	完成	1	使う	1	身動き	1
スムーズ	4	支援	2	ペイント	1	管理	1	使える	1	進める	1
演技	4	集中	2	マイク	1	頑張る	1	始め	1	前々	1
子供	4	照明	2	メリハリ	1	客観	1	思える	1	前日	1
少し	4	常に	2	リズム	1	急	1	指示	1	全身	1
多い	4	心がける	2	ワニ	1	協力	1	指先	1	全体	1
表現	4	人数	2	暗い	1	教える	1	次回	1	全力	1
役割	4	着脱	2	位置	1	狭い	1	自覚	1	素早い	1
タイミング	3	動かす	2	衣装	1	計画	1	自信	1	想定	1
園児	3	動物	2	衣服	1	軽い	1	捨てる	1	早口	1
学生	3	配置	2	一つ一つ	1	決める	1	取り組む	1	増やす	1
楽器	3	本番	2	一緒	1	結構	1	柔軟	1	足りる	1
感じる	3	迷惑	2	運ぶ	1	見越す	1	重い	1	速い	1
事前	3	ある程度	1	運べる	1	元気	1	出せる	1	打ち合わせ	1
周り	3	すき	1	映像	1	現場	1	出入り	1	体育館	1
大道具	3	それぞれ	1	遠く	1	言う	1	出来る	1	体調	1

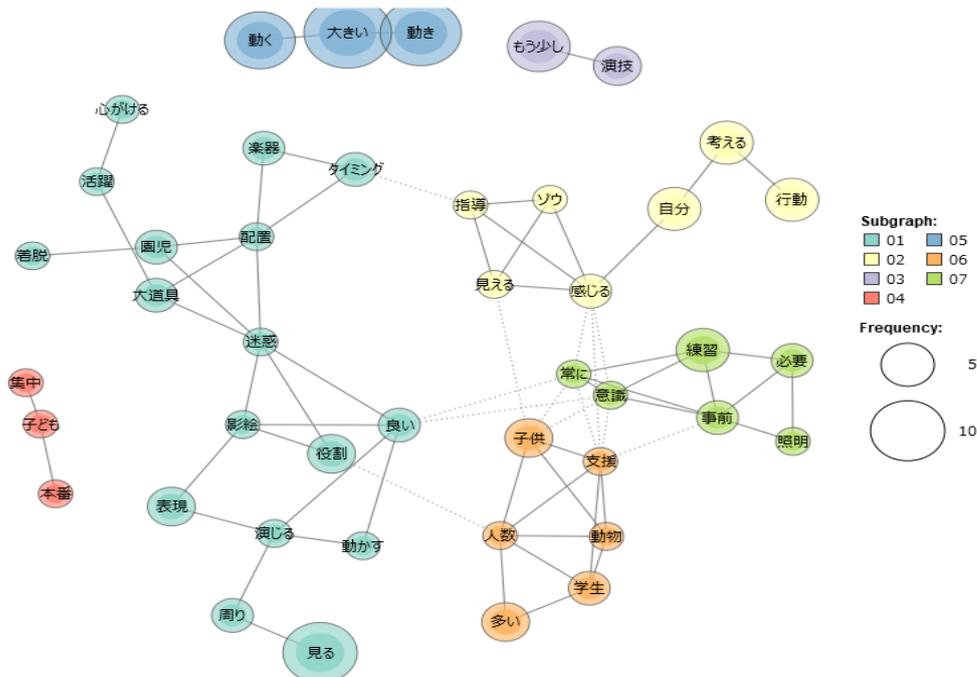


図3 共起ネットワーク

1) 抽出語

「大きい」14回、「動き」12回、「見る」10回、「動く」9回、「子ども」「子供」「園児」を合計すると9回、「考える」、「行動」、「練習」が5回、「演技」「演じる」を合わせて6回、「スムーズ」「表現」「役割」が4回と用いられていた。「大きい」「動き」「動く」「演技」に関しては、舞台上での動き、演技等表現を大きくしたほうがよい、という回答が多かったことからと考えられる。その他の抽出語に関しては、各々の役割に応じた改善点が記されてあった。

2) 共起ネットワークの分析

「大きい」を中心としたグループでは、「動き」「動く」と結びついており、舞台上では動きを大きくする、ということが明白な改善点であると考えられる。「自分」を中心としたグループでは、「自分→考える→行動」「自分→感じる→(別グループの)常に意識→練習」とつながっており、自分自身で考えて行動する、自分で意識して練習することが考えられる。

「役割」「迷惑」「配置」のグループでは、「楽器」「大道具」「影絵」「園児→着脱」等、各々の役割につながっており、自分の役割のなかで改善点を見出したことが窺われる。

3) 記述内容

「動物の動きを大きくするよう指導され、自分では大きくしたつもりだが、映像ではそれほど大きくなかった。」「大きく動かないと遠くの人にはあまり伝わらない。」「常に動くこと、動きのメリハリを意識する」等、表現や演技の改善点が多く挙げられていた。子どもと一緒に表現することについては、「子どもが目立つようにした方がよい。学生が多いと感じた。」との記述も見られた。このほかに、「先を見越して行動する。」「どうすれば自分の役割をスムーズに行えるのか考えられるようになりたい。」「入退場のタイミングをもっとイメージして、想定して動きたい。」との記述もあり、学生は自分の役割を率先して行いたいということが読み取れた。

4) 質問3のまとめ

次年度への改善点として、次の3点があげられる。

① 身体表現、演技、動きの改善

- ア. 動物の表現、影絵、演技の動きを大きくする。
- イ. 動き、演技にメリハリをつける等、表現の工夫。

② 役割ごとの改善

- ア. 子どもの支援→着替えの準備、着脱補助の速さ。子どもが目立つように動く。
- イ. 大道具→道具の出入り等、スムーズな配置転換。効率的な運搬。
- ウ. 楽器隊・歌唱→曲の完成度をあげる。

③ 先を見越した行動

- ア. ステージの動きを予め想定する。
- イ. 役割が急に変わることもあるので、全体の把握が必要。

(4) 今回初めて、園児と短大生が一つの演目を演じたことについて (表4, 図4)

表4 頻出150語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
園児	50	学生	8	一体	4	責任	3	合同	2	動ける	2
短大	31	活動	8	演奏	4	前	3	最初	2	発想	2
子ども	27	協力	8	楽しむ	4	素敵	3	参加	2	必要	2
練習	27	作品	8	関わり	4	多い	3	仕方	2	聞く	2
子供	21	達成	8	頑張る	4	大きい	3	実際	2	変わる	2
楽しい	20	動き	8	貴重	4	直接	3	取る	2	変更	2
感じる	17	演目	7	刺激	4	表現	3	終わる	2	方舟	2
出来る	17	たくさん	6	出る	4	立つ	3	重ねる	2	毎週	2
一緒	16	見える	6	先生	4	話す	3	助ける	2	遊戯	2
見る	15	今回	6	動物	4	それぞれ	2	少し	2	様子	2
保育	15	実習	6	難しい	4	ひとつ	2	触れ合う	2	理解	2
本番	13	少ない	6	役割	4	オペレッタ	2	心配	2	お互い	1
関わる	12	大変	6	影絵	3	コミュニケーション	2	凄い	2	さまざま	1
演じる	11	完成	5	演技	3	セリフ	2	生徒	2	もう少し	1
良い	11	気持ち	5	改めて	3	音楽	2	接す	2	やり方	1
学ぶ	10	見れる	5	覚える	3	家族	2	全員	2	やる気	1
機会	10	支援	5	嬉しい	3	果たす	2	素晴らしい	2	アドバイス	1
行う	10	時間	5	緊張	3	活かす	2	早い	2	イメージ	1
舞台	10	準備	5	迎える	3	感じ	2	体育館	2	ウイルス	1
一つ	9	不安	5	行事	3	感謝	2	対応	2	ギリギリ	1
援助	9	部分	5	最後	3	感動	2	大事	2	コツコツ	1
経験	9	勉強	5	指示	3	教える	2	担当	2	サポート	1
作り上げる	9	コロナ	4	初めて	3	系列	2	知る	2	スタート	1
自分	9	ノア	4	照明	3	繋がる	2	伝える	2	ステージ	1
大切	9	一生懸命	4	成長	3	合わせる	2	動く	2	スラスラ	1

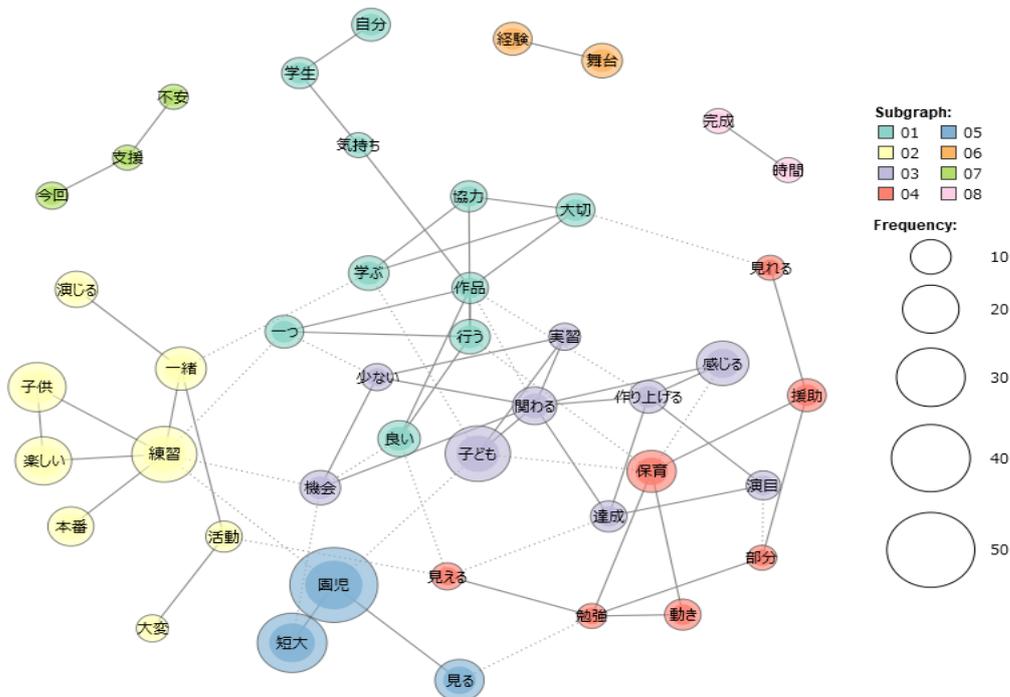


図4 共起ネットワーク

1) 抽出語

「園児」「子ども」「子供」を合わせると98回、「短大」31回、「練習」27回、「楽しい」20回、「感じる」「出来る」が其々17回、「一緒」16回、「保育」15回、「関わる」12回、「良い」11回、「学ぶ」10回となっている。学生は子供と一緒に練習を行い、子供と関わることで保育の学びにもつながり、良い学びになったと捉えられる。

2) 共起ネットワークの分析

「子ども」を中心としたグループでは、「子ども→関わる→作り上げる」「子ども→関わる→達成」「子ども→関わる→実習」等となっており、子どもと実習時より関わり、舞台を作り上げ、達成感が感じられた、と捉えることができる。また、「練習」を中心としたグループでは、「練習→子供→楽しい」「練習→一緒→演じる」となっており、子どもと一緒に演じる練習は楽しい、ことが考えられる。「練習→(他グループ)一つ→作品→協力→学ぶ→大切」となっていることから、練習により一緒に一つの作品を協力して作り上げることは大切であり、学びになっていることが考えられる。「保育」が中心のグループでは、「保育→援助→見れる」「保育→動き→勉強」の言葉のつながりから、学生は保育者の援助や動きを見て学んだことが読み取れる。

3) 記述内容

子どもたちや学生については、「子どもたち、学生がそれぞれの役割を果たし、一つの素敵な舞台となった。」「園児と短大生が協力して活動し。とても良い機会になった。」「子どもたちと学生が同じ舞台を作り上げることの難しさを感じた。しかし、子どもたちも舞台後、達成感を味わっているように見えた。」「楽しかった。表現も歌声も園児に助けられた。いろいろな人に助けていただいて乗り越えられた。」等多数の記述があった。保育者の子どもへの支援に関しては、「子どもと行えて良かった。実習とは違った保育者の動き、声かけの工夫が見られて良かった。」「子どもの手本となる保育者のあるべき姿を理解できた。」等、保育の学びになったとの記述が見られた。また、『ノアの方舟』を通して、「普段話すことのない人と話し、その人の新しい一面をみることができた。」「一つのことを園児、短大生、先生方と行い、準備から最後まで全てのことにおいて全員に感謝だと思った。貴重な経験だった。」と、所属を超えての協力、感謝の言葉が数多く見られた。

4) 質問4のまとめ

園児と短大生が一つの演目を演じたことについて、次の3点にまとめられる。

- ① 所属を超えての連携、それぞれの役割の大切さ
  - ア. 園児だけでも学生だけでも出来ない、一緒に演じたからこそ良いものとなる。
  - イ. お互いに補い合い、協力して一つの舞台を作り上げること
- ② 保育者の姿からの学び
  - ア. 実習とは違った保育者の姿、声かけの工夫等、多くを学べた。
- ③ 楽しい活動であり、達成感、感動を味わった
  - ア. 子どもとの練習等、関わることは楽しく、一つの演目を作ることは達成感がある。

2. 1年生対象アンケート結果

(1) 園児の表現について。(表5, 図5)

表5 頻出150語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
表現	39	音楽	5	素晴らしい	3	自由	2	意識	1	昆虫	1
動物	37	凄い	5	捉える	3	取り組む	2	一所懸命	1	最初	1
動き	27	全体	5	恥ずかしい	3	出る	2	一人ひとり	1	細か	1
感じる	18	伝わる	5	動かす	3	上手い	2	運ぶ	1	細かい	1
合わせる	17	本番	5	動ける	3	色々	2	援助	1	仕方	1
動く	17	タイミング	4	部分	3	真剣	2	演奏	1	使用	1
自分	15	楽しい	4	聞く	3	生き生き	2	各自	1	子供	1
それぞれ	12	元気	4	歩く	3	前	2	楽しむ	1	思いっきり	1
出来る	12	言う	4	鳴き声	3	素早い	2	活かす	1	思える	1
見る	11	身体	4	役割	3	素敵	2	滑らか	1	指揮	1
大きい	11	速い	4	たくさん	2	早い	2	完璧	1	指導	1
園児	10	堂々	4	カタツムリ	2	多い	2	観客	1	支援	1
使う	10	舞台	4	チャイム	2	雰囲気	2	間違える	1	止まる	1
一生懸命	9	分かる	4	リアル	2	面白い	2	客席	1	似せる	1
演じる	9	良い	4	違う	1	いろいろ	1	驚き	1	自身	1
可愛い	9	練習	4	印象	2	さまざま	1	驚く	1	自然	1
子ども	9	ハンド	3	演技	2	ひとつ	1	近く	1	自立	1
上手	9	ピアノ	3	気持ち	2	びっくり	1	繰り返し	1	主役	1
感動	8	ベル	3	緊張	2	イメージ	1	繋がる	1	習う	1
楽器	7	出す	3	見習う	2	シーン	1	軽い	1	重い	1
頑張る	7	小さい	3	見比べる	2	トーン	1	軽やか	1	純粹	1
リハーサル	6	真似	3	行う	2	ポーズ	1	決める	1	順番	1
可愛い	6	成長	3	合う	2	ライオン	1	言える	1	小動物	1
特徴	6	精一杯	3	再現	2	リズム	1	工夫	1	場面	1
セリフ	5	先生	3	残る	2	意外と	1	合図	1	伸び伸び	1

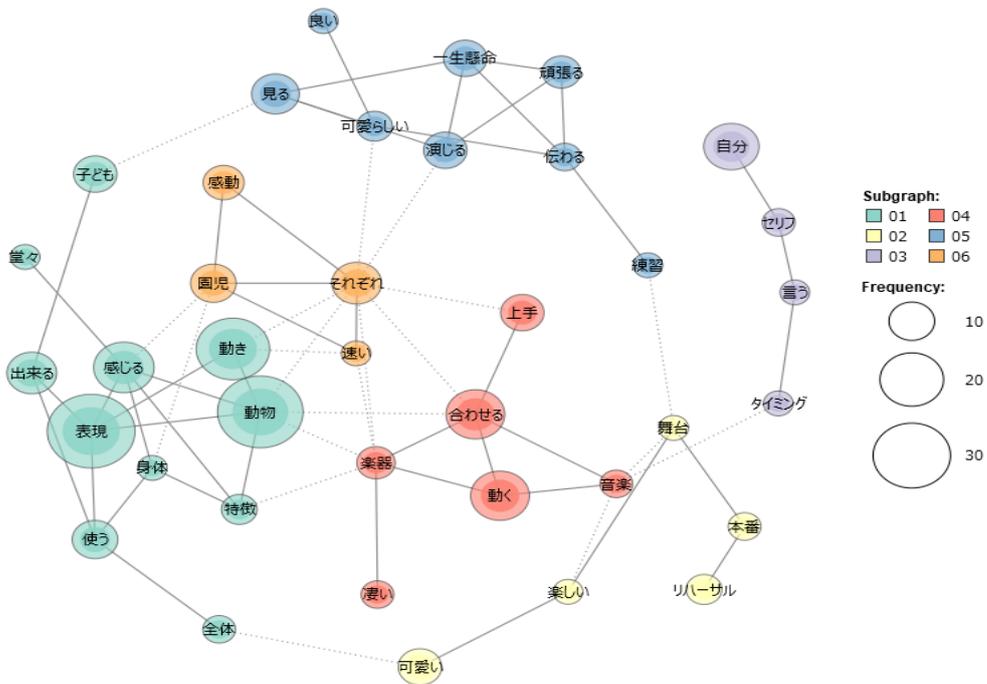


図5 共起ネットワーク

1) 抽出語

「表現」39回、「動物」37回、「動き」27回、「感じる」18回、「合わせる」「動く」17回用いられていた。このほかに、「一生懸命」9回、「可愛い」9回、「上手」9回となっていた。このことから、園児の動物の表現に関する記述が多数であったと読み取れる。

2) 共起ネットワーク

「表現」を中心とするグループでは、「表現」は「動物」「動き」「感じる」「出来る」とつながっており、園児が体を使って、堂々と動物の表現を行っていたことが捉えられる。

「動物」から別グループ「合わせる」に繋がっており、「合わせる」は「上手」「楽器」「動く」「音楽」と結ばれており、動物の表現において楽器の音や音楽に合わせて動いていたことが表されている。さらに、「演じる」のグループでは、「可愛らしい」「一生懸命」「頑張る」とつながり、園児がどのように演じていたのかが表されている。

3) 記述内容

「動物になりきって大きく動きをつけ、一生懸命頑張っていた。」「ピアノや楽器の音に合わせて楽しそうに動いていた。」「動物の特徴をとらえ、動きの速さや声の出し方を工夫していて素晴らしかった。」「カタツムリの動きが本物に似せていてよりリアルだった。」等、園児の動物表現についての記述が多かった。このほかに、「リズムに合った動きをしていてすごいと思った。楽しんでやっていた。」「ピアノに合わせて木を運ぶときの足の動きは、リトミックでやったことが生かされていた。」と普段の授業で行っているリトミックに結びついた記述もあった。また、少数ではあったが、「チャイムやハンドベルを演奏するときに、しっかりと指揮を見ながら出来ていて、子どもたちが出来ることは意外に多いと感じた。」「練習した成果を舞台上で発表できたという成功体験が、これからも頑張ろうとする気持ちにつながるのではないかと思う。」という記述もあった。

4) 質問1のまとめ

これまでの分析・記述内容から、園児の表現について、次の2点にまとめられる。

① 園児の豊かな表現の表出

- ア. 音楽をしっかり聞き、タイミングを合わせ、一生懸命に動物を表現していた。
- イ. それぞれの動物の特徴をふまえ、鳴き声や動きを工夫していた。
- ウ. 本番でも恥ずかしがらずに堂々と、楽しんで表現していた。

② リトミックを生かした表現

- ア. ピアノに合わせた動き等、普段の授業で園児と行っているリトミックの要素が随所にとり入れられていた。

(2) 短大生の表現支援について、感じたこと。(表6, 図6)

表6 頻出150語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
子ども	40	出す	4	立つ	3	参考	2	やる気	1	印象	1
園児	32	上手い	4	ステージ	2	使う	2	オーバー	1	引き込む	1
動き	25	凄い	4	タイミング	2	指示	2	ギリギリ	1	演奏	1
表現	25	素晴らしい	4	ダンス	2	指導	2	コーラス	1	応じる	1
感じる	20	堂々	4	フォロー	2	実習	2	シアター	1	押す	1
支援	18	発表	4	安心	2	主役	2	スピード	1	音楽	1
動く	18	舞台	4	意識	2	手伝う	2	スペース	1	音程	1
大きい	13	保育	4	違う	2	上手	2	スムーズ	1	歌える	1
合わせる	11	本番	4	引っ張る	2	場面	2	ゼミ	1	歌唱	1
子供	11	目立つ	4	学ぶ	2	振り	2	チームワーク	1	感じ	1
一緒	10	良い	4	楽しい	2	身振り	2	トン	1	観る	1
自分	10	ノア	3	感情	2	全部	2	ナレーター	1	間違う	1
短大	10	リハーサル	3	頑張る	2	素敵	2	ノア	1	含める	1
誘導	10	影絵	3	寄り添う	2	程度	2	ベース	1	危険	1
援助	9	演じる	3	気持ち	2	動かす	2	マニュアル	1	機会	1
見る	9	家族	3	貴重	2	方々	2	メイン	1	気持ちいい	1
出来る	8	歌声	3	驚く	2	面白い	2	リアル	1	技術	1
動物	8	楽器	3	見える	2	目線	2	リズム	1	緊張	1
分かる	6	感動	3	見せる	2	様々	2	リラックス	1	近づける	1
お手本	5	教える	3	後ろ	2	さりげ	1	ルート	1	空く	1
演技	5	仕方	3	効果	2	さり気	1	レベルアップ	1	経験	1
先輩	5	出る	3	工夫	2	それぞれ	1	圧巻	1	繋がる	1
恥ずかしい	5	少し	3	考える	2	たくさん	1	圧倒	1	欠く	1
来年	5	全体	3	行く	2	とり方	1	位置	1	見守る	1
サポート	4	配慮	3	高い	2	もう少し	1	違い	1	見本	1

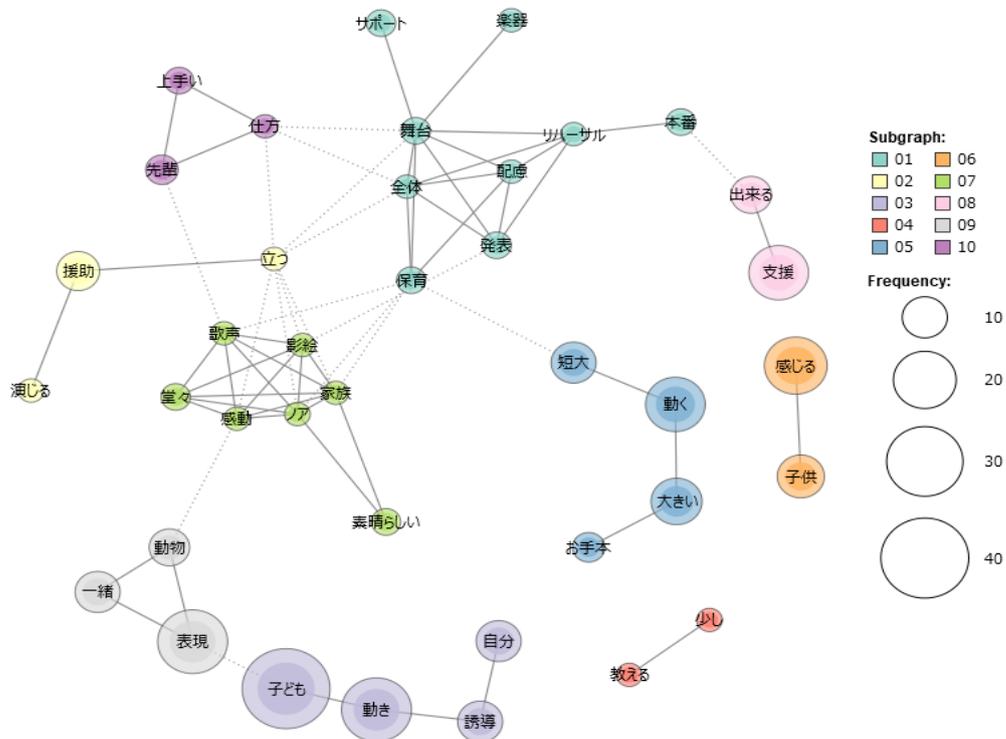


図6 共起ネットワーク

1) 抽出語

「子ども」「園児」「子供」合わせて83回、「動き」25回、「表現」25回、「感じる」20回、「支援」18回と用いられていた。このほかに、「一緒」「短大」「誘導」10回、「援助」9回となっており、子どもが表現するにあたり、学生が誘導や援助を行う等子どもへの支援を行ったことが読み取れる。

2) 共起ネットワーク

「子ども」を中心としたグループでは、「子ども→動き→誘導→自分」「子ども…表現→一緒→動物」となっており、子どもの動きを誘導し、一緒に動物を表現したことが捉えられる。

「動く」を中心としたグループからは、「動く→短大→(別グループ)保育」へとつながり、「保育」を起点として、「保育」「全体」「舞台」「サポート」「配慮」「リハーサル」「本番」は、其々つながりが見られる。また、「保育」から別グループ「家族」「ノア」「影絵」「歌声」「堂々」「感動」「素晴らしい」とつながっており、学生が保育者として子どもたちを援助しつつ、自分の役割も堂々と果たしていたことが考えられる。

3) 記述内容

学生の子どもに対する支援については、「園児と短大生のチームワークで、より演技がリアルに表現されているように感じた。生き物の動きや波等自然の表現は迫力があつた。」  
 「短大生が大きく動くことで、園児も同じくらい大きく動いているように感じ、短大生の表現支援は園児の気持ちも支援するものだと考えた。」  
 「短大生がお手本になるように動いて見せて、子どもたちを引っ張っているのが良かった。」  
 「タイミングや誘導をその時の状況に合わせて支援していた。」  
 のような記述が見られた。このほかに、学生の表現については、「短大生として舞台に立つだけでなく、一人の保育者として子どもたちをサポートしていた先輩たちが素敵だった。」  
 「影絵や効果音、ノアとその家族、裏方などの役割もかかせないと感じた。」  
 「園児たちとの連携を経験することによって、さらに保育士として学ぶところがあると思う。」  
 「実習だけでなく、就職したあとも、貴重な経験になる。」  
 のような記述も見られた。

4) 質問2のまとめ

これまでの分析・記述内容から、短大生の表現支援について、次の2点にまとめられる。

① 学生と園児のチームワークによる豊かな表現

- ア. 園児の隣で一緒に演じたり、踊ったりすることで、園児は安心して表現していた。
- イ. 子どもたちの動線をわかりやすく援助し、学生も一緒に演じていた。
- ウ. 一緒に演じることで、迫力ある表現となった。

② 舞台での役割と保育者としての経験

- ア. 学生は自分から大きく動きながら、指示を出して園児の誘導を行っていた。
- イ. 園児たちとの関わりから保育士として多くを学び、現場でも生かせる。

(3) 舞台「ノアの方舟」を、短大生と園児と一緒に発表したことについて。(表7, 図7)

表7 抽出語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
園児	61	演じる	5	経験	3	言う	2	返事	2	リアル	1
短大	52	感動	5	繋がる	3	後ろ	2	補える	2	リズム	1
一緒	28	支援	5	就職	3	考える	2	方舟	2	圧倒	1
感じる	23	凄い	5	出る	3	行く	2	本番	2	意識	1
子ども	23	素敵	5	先生	3	合わせる	2	無い	2	一人ひとり	1
表現	19	大きい	5	前	3	作りあげる	2	面白い	2	一体化	1
発表	17	大人	5	体験	3	実際	2	来年	2	一致	1
動き	14	年齢	5	難しい	3	主役	2	話	2	引き立つ	1
舞台	13	ひとつ	4	お互い	2	取れる	2	おんぶ	1	引っ張る	1
出来る	12	違う	4	お互いに	2	初めて	2	お話	1	影響	1
楽しい	10	一つ	4	もう少し	2	小さい	2	かかわり合い	1	演劇	1
作品	10	演技	4	シーン	2	少し	2	たくさん	1	演奏	1
素晴らしい	10	学生	4	セリフ	2	信頼	2	びっくり	1	音楽	1
作り上げる	8	協力	4	リード	2	全員	2	やり遂げる	1	可愛い	1
良い	8	系列	4	一生懸命	2	全体	2	イメージ	1	家族	1
見る	7	自分	4	印象	2	息	2	オー	1	歌声	1
子供	7	実習	4	影絵	2	大丈夫	2	カタツムリ	1	改めて	1
それぞれ	6	保育	4	歌う	2	大切	2	コミュニケーション	1	学べる	1
サポート	6	練習	4	覚える	2	達成	2	ステージ	1	活かす	1
一体	6	ノア	3	学ぶ	2	団結	2	スムーズ	1	関わる	1
可愛い	6	援助	3	楽しむ	2	知る	2	ナレーション	1	寄り添う	1
機会	6	楽器	3	活動	2	伝わる	2	バラバラ	1	強い	1
見える	6	関係	3	完成	2	動作	2	バランス	1	驚く	1
動く	6	気持ち	3	頑張る	2	物語	2	メイン	1	緊張	1
動物	6	貴重	3	教える	2	分かる	2	メイン	1	繋げる	1

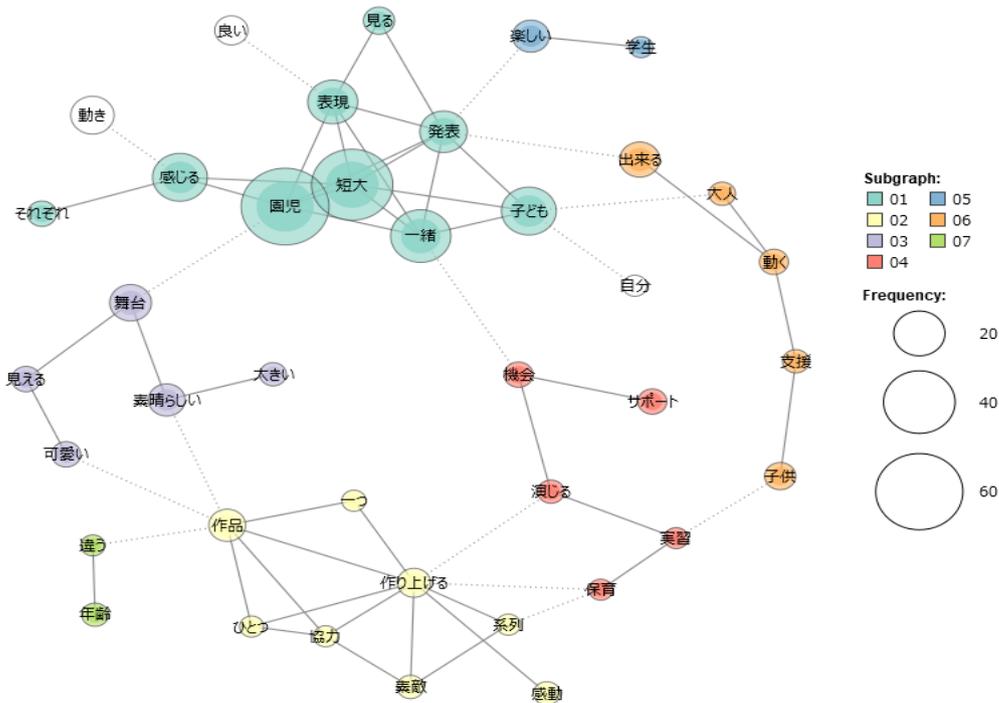


図7 共起ネットワーク

1) 抽出語

「園児」「子ども」「子供」を合わせて91回、「短大」52回、「一緒」28回、「表現」19回、「発表」17回と用いられていた。このほかに、「楽しい」10回、「作品」10回、「素晴らしい」10回となっている。園児と学生と一緒に表現することで、楽しく素晴らしい作品となったことが考えられる。

2) 共起ネットワーク

「園児」「短大」が中心のグループでは、「一緒」「発表」「表現」とつながっており、「一緒」からは別グループの「機会→演じる→(別グループ)作り上げる」へとつながっている。「作り上げる」を起点に「作品」「系列」「協力」「素敵」が放射状につながっている。このことから、園児と短大生と一緒に表現の発表をすることで、一緒に演じ、園児をサポートする機会となる。さらに一緒に演じることは系列で一つの作品を協力して作り上げる素敵なことであると捉えることができる。

3) 記述内容

「園児と一緒にいることで子どもとの関係を深め、互いに良い刺激を受けながら工夫し、より良い表現へとつなげることができる。」「短大生と園児のそれぞれの良さが引き立っている舞台だった。」等、園児と学生と一緒に演じたことについて、楽しそうだった、感動した、心が揺さぶられた等の記述が多かった。また、系列での連携について、「系列で協力して一つのものを作り上げることは素敵なことだ」「このようなことができるのは、系列園があるからという短大の特権だ。」等のような記述もあった。保育や支援に関する記述では、「一緒に練習するなかで、子どもが好きな動きやリズムなどを知ることができる。」「実際に現場で発表会となると一緒に演じるイメージは無いので、一緒に一つの作品を作り上げられるのは良い経験だ。」等の記述が見られた。このほかに、来年自分たちが行くことになるので、頑張りたい、楽しみである、との記述もあった。

4) 質問3のまとめ

これまでの分析・記述内容から、舞台「ノアの方舟」を短大生と園児と一緒に発表したことについて、次の2点にまとめられる。

① 短大生と園児の一体感

ア. 短大生は園児の動きややりたいことを尊重しつつ、お互い刺激し合い、補い合い、どちらも成長していた。

イ. 全員が同じ目標へ向かい、努力し、達成感があった。

② 系列の連携で作り上げる表現

ア. 連携の歯車が合っていた。初めて関わる子どもが多かったはずなのに、息がぴったり合って表現していた。

イ. 子どもたちと触れ合える機会が実習だけでなく、このような発表を一緒に行えるのは系列の強みで、子どもについてより知ることができる。

(4) 舞台「ノアの方舟」から、学んだこと。(表8, 図8)

表8 抽出語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
大切	27	争い	5	指示	3	仕方	2	登場	2	メイン(名詞)	1
学ぶ	23	発表	5	支援	3	思いやり	2	難しい	2	哀れ	1
舞台	18	平和	5	持つ	3	自然	2	分かる	2	暗い	1
見る	16	保育	5	出す	3	実感	2	暮らす	2	意見	1
協力	13	援助	4	助け合う	3	守る	2	無い	2	異なる	1
子ども	13	演技	4	生活	3	出る	2	様々	2	一つ	1
ノア	12	家族	4	全て	3	助ける	2	良い	2	引き込む	1
人間	12	洪水	4	素直	3	少し	2	いつか	1	影響	1
感じる	11	考える	4	大事	3	乗る	2	お互い	1	映る	1
動物	11	作り上げる	4	大人	3	場面	2	それぞれ	1	映像	1
表現	10	周り	4	伝える	3	世界	2	たくさん	1	英雄	1
園児	9	出来る	4	動く	3	凄い	2	ひとつ	1	何事	1
子供	8	正直	4	必要	3	成長	2	みな	1	可能	1
動き	8	素晴らしい	4	コツコツ	2	生き物	2	もう一度	1	果たす	1
楽器	7	仲良く	4	リズム	2	先生	2	やる気	1	解る	1
生きる	7	優しい	4	悪い	2	先輩	2	オーブ	1	壊す	1
堂々	7	立つ	4	違う	2	戦争	2	カサカサ	1	学べる	1
一緒	6	サポート	3	影絵	2	全員	2	ケンカ	1	楽しめる	1
演じる	6	改めて	3	音楽	2	相手	2	スクリーン	1	割れる	1
気持ち	6	楽しい	3	楽しむ	2	続ける	2	セリフ	1	活動	1
方舟	6	関わり	3	救う	2	多い	2	チャレンジ	1	活躍	1
練習	6	起こる	3	興味	2	大きい	2	ノア	1	活用	1
行動	5	言う	3	繋がる	2	短大	2	ピアノ	1	完成	1
自分	5	作る	3	見守る	2	恥ずかしい	2	ミサイル	1	完璧	1
神様	5	使う	3	行い	2	諦める	2	メイン(形容動詞)	1	感じとる	1

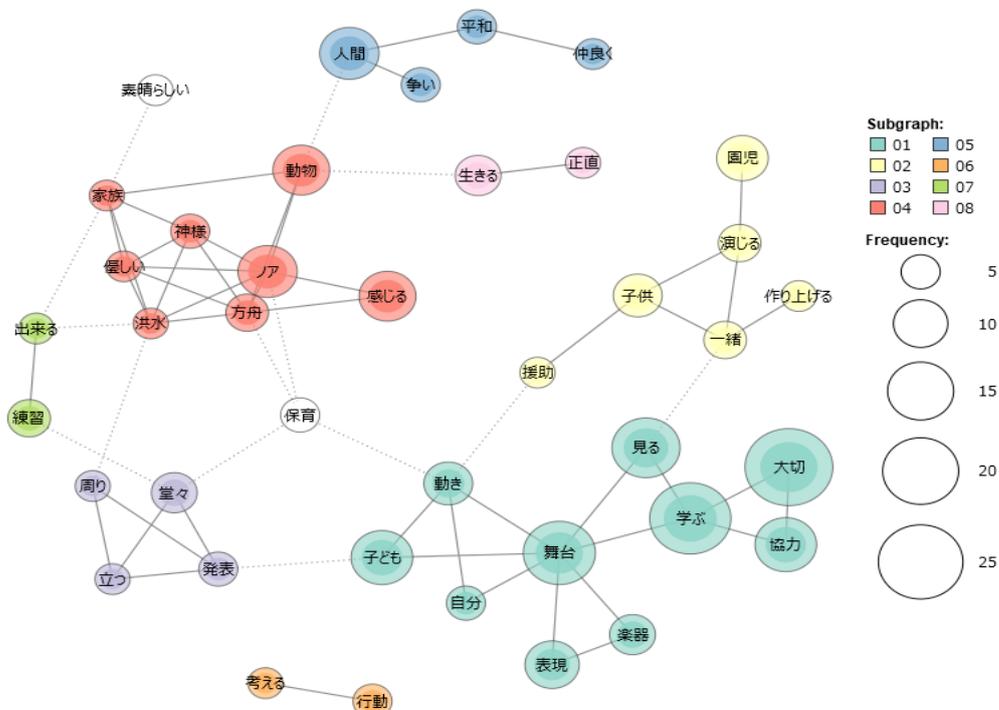


図8 共起ネットワーク

1) 抽出語

「大切」27回、「学ぶ」23回、「舞台」18回、「見る」16回、「協力」13回、「子ども」「園児」「子供」は合わせて30回用いられていた。このほかに、「生きる」「争い」「平和」等これまであまり抽出されていない言葉が用いられていた。これらの言葉から「協力することの大切さ」「堂々と表現することの大切さ」「争いのない平和の大切さ」等が捉えられる。

2) 共起ネットワーク

「学ぶ」を中心とするグループでは、「学ぶ→大切→協力」となっており、協力することの大切さを学んだことが考えられる。「学ぶ」は「舞台」とつながり、「舞台」からは放射状に「動き」「子ども」「自分」「表現」「楽器」とつながっている。このことから、舞台上の動き、子どもの動き、自分の動き、舞台での表現等を学んだことが捉えられる。

「動き」は、「保育」とつながり、「保育」から「ノア」「方舟」のグループへと移っていく。「ノア」は「神様」「家族」「優しい」「洪水」「動物」とつながっている。「動物」は別グループ「人間」へと移っていき、「人間→争い」「人間→平和→仲良く」とつながっている。このことから、ノアの物語を通して人間の争いや平和へと結びつけたのではないかと考えられる。

3) 記述内容

「子どもたちの動きを見て、どのように援助し、素晴らしい舞台にするために動きを見て協力性を学んだ。」「協力することの大切さ、全員で助け合って作ること。」等、舞台を作っていくうえでの協力や難しさ、楽しさの記述が多く見られた。「先生や2年生など保育者の動き方や子どもへの正しい指示の出し方。」「音楽は人の興味を惹きつける力がある。たくさん楽器があり、楽器の音に合わせて表現していた。」等、子どもへの支援の仕方と一緒に表現することも記述されていた。さらに、「宗教の講義で『ノアの方舟』を学んだが、大洪水から身をまもるため、神の教えに答え、周りの人々に拒否されても諦めずに方舟を造るノアの姿は、現代の生き方にもつながるのではないかと考えた。」「ノアの優しい心に胸を打たれた舞台だった。」「助け合いや相手を信じる気持ちなど、大切にしないといけない。」等、ノアの物語からの学びの記述が数多く見られた。これは、2年生の「ノアの舞台から学んだこと」には、見られなかったことであり、1年生はノアの物語の持つメッセージも感じ取り学んでいたことが考えられる。

4) 質問4のまとめ

これまでの分析・記述内容から、舞台『ノアの方舟』から学んだことについて、次の3点にまとめられる。

① 「園児と短大生で協力し一つの舞台を作る素晴らしさ

- ア. 一人ではできないことも、全員で助け合い、協力すればできる。
- イ. 年齢の違いを超え、舞台に立っている人、裏方が力を合わせ作り上げていた。

② 子どもの表現を導き出すような適切な支援

- ア. 子どもたちが動物を演じることで、動物について理解を深め、リズムにのり身体を動かし、リトミックの楽しさを体感していた。本番で動きや台詞を堂々と表現する子どもの姿に、無限の可能性を感じた。子どもの成長に繋がる経験だ。子どもが輝いていた。

イ. できないと決めつけず、できるような方法、チャレンジする気持ちを養えるような保育者になりたい。

③ 「命の大切さ、平和と共存」

ア. ノアの世界から、平和の大切さ、人間、動物、全ての生き物が共に支え合い共存していくことが必要だ。

イ. 人間は皆、仲良く平和に暮らすべきだ。世界を見ると、戦争やミサイルなど簡単に人や物に害を与える行動をしてしまう。改めて私達はどうするべきか考えさせられると思った。

(2) 系列幼稚園星の子シアター担当保育者に自由記述でアンケートを行った。

1) 「短大でのリトミック前後の園児の様子について」

- ① リトミック以前はリズムや音に興味を向けることがなかったが、短大生の援助を得ながら活動することで、注意深く音を聴いたり感じたりするようになった。音符カードなどに自信がない子どもたちも(分からなくてもお姉さんたちに助けってもらえるという)安心感を持って、伸び伸びと楽しむことができた。
- ② 園活動では、音やリズムを体感しながら遊んだり、静と動の動きを意識した遊びにも興味を持つようになった。
- ③ ピアノの音を聞き分け、音符の長さや強弱などを表現できるようになり、自主活動中にも子ども同士で楽しむ様子が見られた。(りすの音→小さく、ぞうの音→大きく等)
- ④ 呼吸法を学び、普段の会話でも喉に力を入れず柔らかく穏やかに話すようになった。
- ⑤ 短大生と一緒に体を動かしリトミックを楽しむことで、子どもたちは毎回帰りのバスの中で「楽しかった！また来たいね！」という会話をしていた。
- ⑥ 様々なタイプの短大生と関わることにより、引っ込み思案だった子どもも初めての人に馴染みやすくなった。

2) 「ノアの方舟の舞台で園児の学びとなったこと」

- ① 様々な音楽に触れ、他園児や短大生の表現からも刺激を受け、イメージを膨らませながら動物になりきって表現することができた。それにより、音楽そして表現をより楽しめるようになった。
- ② 大勢が一体となった舞台を作り上げるために、みんなが力を合わせて協力する大切さを学ぶ機会となった。
- ③ 様々なタイプの短大生と関わることにより、引っ込み思案だった子どもも初めての人に馴染みやすくなった。
- ④ 短大生の歌声を聴き、自分たちとは違う歌声を感じるすることができた。大勢で声を合わせて歌う心地よさを感じるすることができた。
- ⑤ ノアの方舟のお話を通して、思いやりの大切さや生き物への感謝の気持ちを持つことができた。

3) その他

- ① 練習中、説明や短大生の動きの待ち時間が長くなる場合には、集中できず意欲を持続できないこともあった。
- ② 教育実習に来ていた短大生との活動だったので、短大生に対する馴染みと信頼感があり、お互いに受け入れやすさがあるように感じた。

## V. 結論

総合表現「ノアの方舟」を通し、学生が園児とかかわりながら幼児期の実態や音楽要素の心身への影響を観察し、教員や保育現場での指導の過程を学べたことは、保育者を目指す学生たちにとって非常に有意義なものであった。また、年長児担当保育者より、学生の援助を得ながら活動することで、注意深く音を聴いたり感じたりするようになった。音符カードなどに自信がない子どもたちも(分からなくてもお姉さんたちに助けってもらえるという)安心感を持って、伸び伸びと楽しむことができたので、次年度も学生とのリトミック継続を要望している。

アンケートの結果からも、音楽表現、造形表現、身体表現に関わる教員間の協働、園児同士、園児と学生、現場の保育者と学生、それぞれの所属を超えた関わりによって、総合表現がなされたことは、演じた側と観覧した側、双方の学びとなったことが確認された。学生が舞台上の園児たちの誘導や一緒に表現発表を体験したことで、保育の実践的な学びとなり、教育的な効果が得られたことが認められた。実習以外で園児と身近に関わり、一緒に舞台を作り上げることができるのは、系列ならでの連携のおかげであり、保育者を目指す学生にとっては大変貴重な経験であったと考えられる。また、園児と短大生が一つの舞台を作り上げることで、お互いに刺激を得ることにより相乗効果が生まれ、表現の幅がより広がった総合表現となることが確認された。

## VI. 謝辞

本研究にあたり、八戸学院大学短期大学部後援会より助成金を賜り、感謝申し上げます。また、本法人の教職員の方々、出演してくださった園児と学生の皆さんにも心よりお礼を申し上げます。

### 参考・引用文献

Parry, Alan & Linda. 1996. 「Look for the rainbow」『ノアのはこぶね』. 光原百合訳. 女子パウロ会

日本聖書協会. 2008. 『みんなの聖書・絵本シリーズ(1)せかいのはじまり〈旧約聖書〉』. 日本聖書協会

Hogrogian, Nonny. 2015. 「Noah's ark」『ノアのはこぶね』. 藤本朝巳訳. 日本キリスト教団出版局

中村キセ. 欠畑みな子. 附田勢津子. 保育内容『表現』の実践 第1報 ●虹理論●とエプロンシアター. 八戸短期大学研究紀要第20巻 151～168頁, 1997

附田勢津子, 欠畑みな子. 保育内容『表現』の実践 第2報 音と色とリズム・四季. 八戸短期大学研究紀要第21巻 147～159頁, 1998

クラシック音楽ファン <https://classical-music.fun/>

Burgmüller, Johann Friedrich Franz: 18 Etudes de genre (faisant Suite aux Etudes faciles op. 100) L'Orage Op.109-13 [標準版] 全音楽譜出版社

第1回光星学院八戸短期大学幼児教育学科音楽会プログラム 昭和55年3月8日八戸市公民館

第2回光星学院八戸短期大学幼児教育学科音楽会プログラム 昭和56年3月8日八戸市公民館

#### 執筆者紹介 (所属)

中嶋 栄子 八戸学院大学 幼児保育学科 准教授  
附田 勢津子 八戸学院大学 幼児保育学科 名誉教授  
澤井 睦美 八戸学院大学 幼児保育学科 教授  
池田 拓馬 八戸学院大学 幼児保育学科 准教授  
本吉 好 八戸学院大学 幼児保育学科 講師  
坂本 利枝子 八戸学院大学 幼児保育学科 講師  
橋本 知子 八戸学院大学 幼児保育学科 講師  
松坂 真奈美 八戸学院大学 幼児保育学科 非常勤講師